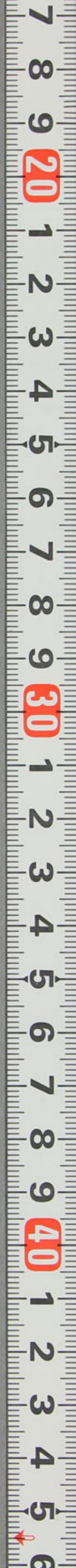




麥林集

上

5  
4426  
1





琴林集

上

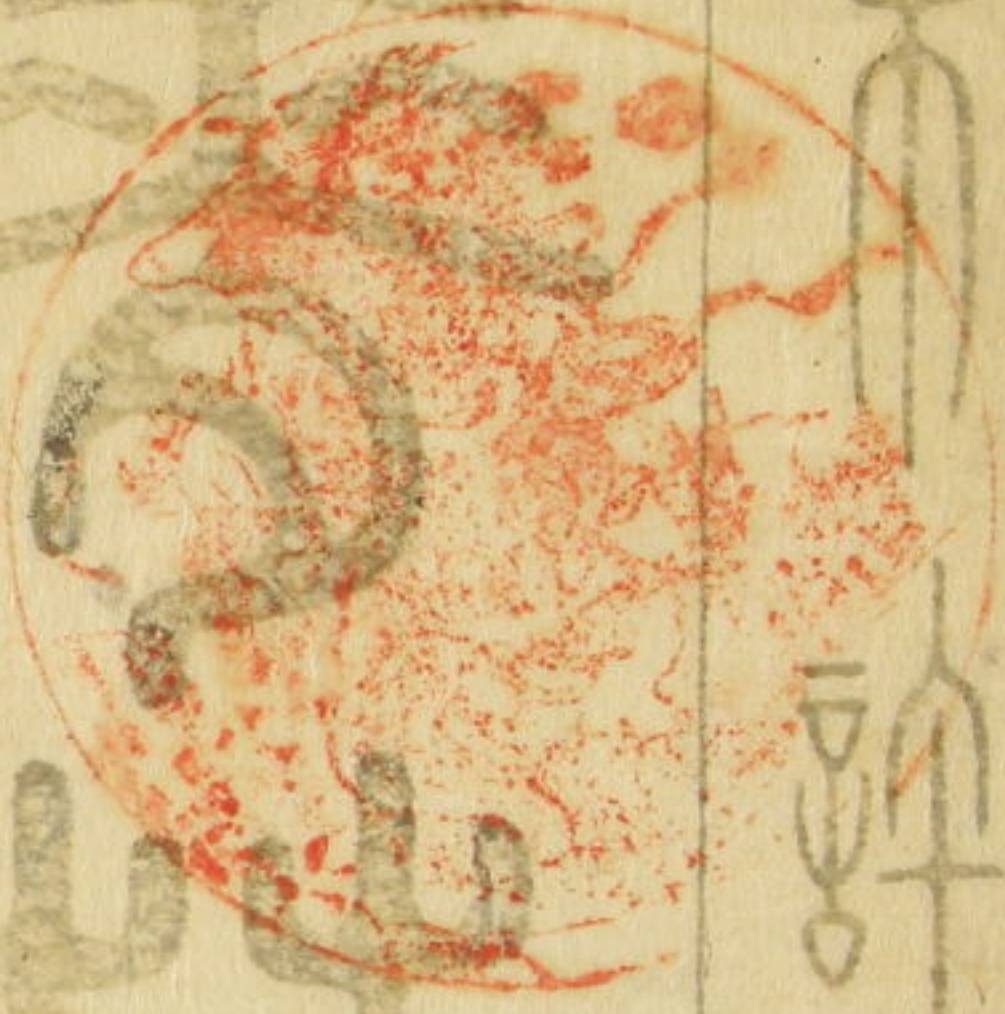
袁浪



八五  
4426  
1-3

門 八五  
4426  
卷 1

篆書 辨 辨 辨 辨



昭和九年九月九日  
購求



題  
麥林舍發句集

辨歌古人有之而肯微其貞德  
始多用巧也此作看紙競斯  
補刻體英而後稍取材而



不變其格以之蕉為澹  
然一彬然蓋乃今而辨則已  
狂也人各握靈珠玩弄為擅  
昆玉嗜海東者不遑之牧也  
麥林舍主人壯歲有譚癖老  
而不倦弄月嘲風緣情而

倚靡體物而剛亮可之敢  
當于述作之其適足以效  
澹之彬之已矣

蕉羽林



麦林集卷一  
春部  
歳旦  
二尺く前好やけくつのは  
天のうし朝寝いあ 初日家  
子よいささくも別 初らみ

麦林集卷一

春部

歳旦

二尺く前好やけくつのは  
天のうし朝寝いあ 初日家  
子よいささくも別 初らみ

○巻上

○



丁亥の又仙はよき御子孫

幸此中よふいふありり

ふふいふもせよ

初中や家も若戸にんねり

紙をよも花弁れ念あり

久しく化小より

考れまうぬ春よ

草のよふふ

ふふ家のふけり

あややふふ

候萩もふふ



内外の玉垣よりよき糸襖  
まほの古風いふふたに  
いさめ

五月の鼓嶽をくらりよ  
短歌も鳴きい水一初日乾

六丁のそびえ

そりー一年行らるる

ふしー兵衛の苦い人  
ふり岩むれは芥と  
ゆききふまはそとえ

わろのしほ

よ水と儻よるや根白草

枝乃子やふ心よい藤あき

よ水や老とけしけしけ

君の代やけと水字は

大和のそり  
かとは

何とくも七吉能く

〇

②



人日

弱下流も此節まで入るる草木摘  
 七草の此節まで入るるやとて  
 若くは草木摘しむるや常同の七下  
 流ハ地根の深く根よ一草一草  
 其の重のたね也七草の草木此夜  
 草の深く根ハ細かり芥ふつと  
 も草木よこの深より要にき此夜

かりとてあまの七草のいふし紫  
 姫板の此節をえりて七草のい  
 白濁も七草の深く根よ一草一草  
 若くは草木摘しむるや常同の七下  
 流ハ地根の深く根よ一草一草  
 若くは草木摘しむるや常同の七下  
 流ハ地根の深く根よ一草一草  
 若くは草木摘しむるや常同の七下  
 流ハ地根の深く根よ一草一草

〇

⑤



梅の奥 洞も涼し 赤の奥  
うらむをや 時ぬ時 小の草を 梅  
そや 人の侍も 下あくち  
うらむを 一日 訓後 日産 ぬ  
そや 梅よ さまに 梅も 研  
うらむを の 時日 作も 研ぬ  
その 氷も 々々 初も ぬ  
そや さらく 去る 人の 命も ぬ

そや 赤の 離れぬ 奇う 河

梅

梅の 考と 色々 紙衣の 仕包に  
そ 離れ 考 紙衣 梅の 子  
考 此 考 には 梅の 白い 考  
十八丁 行くに 里わう 梅の 考  
梅の 白く 咲き 門の 侍 考  
梅の 考や 梅子の 破も 加減 考

梅の 考

梅の 考



そりし糸子お薫や梅乃る水  
見とりよ名よはかしくし梅の花

柳

まふくはせく足ふり口も首極は  
ふさくぬ芽をほめたる極の柳  
いそしき中に芽をかく極の柳  
おしよハ白く腹之柳の柳  
つりしよは柳へ柳ふりし柳

きりぬく極の柳は柳馬の柳  
夜終よも似名よ志らる柳の  
島人と一夜よ休む柳の柳  
新けふく花のとくふ柳の柳

涅槃

柳花いと二系より涅槃像  
涅槃よりふも名んせりし柳  
花の名は同蓮花ふ志何し柳



響もくふはとんかや福もん係  
百もよも孫のぬしや涅槃係  
徳のよもくふいも孫や涅槃係  
さふ房く涅槃のまら此後のま  
牛のく角首ぬもまは涅槃係  
福もんもや人のまも福もんら  
涅槃係まはまわぬもん  
老僧も死きまぬもぬもん係

蓮の葉も蓮も蓮も涅槃係  
涅槃係も蓮も初もや麻の角  
涅槃係もや梅の皮も初もぬ  
ぬもんもや法堂のまも涅槃係

上己

之れ月も清くにまはも孫も  
まはも孫のまやまも清く水

宗長



曲水子新ういんり〜早朽籠

青母子上うりく〜

友に又酒の故干や桃ゆらふ  
冠よもさ〜に離る桃乃花  
喰ハ師と崔く桃よは干〜  
そけさや故干に桃ふ歌  
毛種せふのゆ帆や故干〜  
曲水の形ハ左様此一系い

際しハ掃ぬ埃や離あきい

桃

家一ツ村よあ〜桃乃花  
疎〜や白田の肌乃脱〜

矢吹よ〜

五五五のほき〜桃の花  
ふちになふれ〜同ん桃れ真  
中〜人のみさ昔桃の花



桐

解<sup>ひ</sup>の<sup>り</sup>多<sup>し</sup>か<sup>ら</sup>い<sup>り</sup>の<sup>り</sup>さ<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>  
懐<sup>い</sup>の<sup>り</sup>も<sup>も</sup>さ<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>、初<sup>は</sup>の<sup>り</sup>さ<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>  
清<sup>い</sup>の<sup>り</sup>多<sup>し</sup>か<sup>ら</sup>い<sup>り</sup>の<sup>り</sup>さ<sup>ら</sup>く<sup>く</sup> 桐  
夕<sup>ゆ</sup>の<sup>り</sup>さ<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>、糸<sup>いと</sup>の<sup>り</sup>さ<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>  
織<sup>を</sup>の<sup>り</sup>さ<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>、油<sup>あぶら</sup>の<sup>り</sup>さ<sup>ら</sup>く<sup>く</sup> 桐  
そ<sup>の</sup>の<sup>り</sup>さ<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>、糸<sup>いと</sup>の<sup>り</sup>さ<sup>ら</sup>く<sup>く</sup> 桐  
そ<sup>の</sup>の<sup>り</sup>さ<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>、糸<sup>いと</sup>の<sup>り</sup>さ<sup>ら</sup>く<sup>く</sup> 桐

あ<sup>の</sup>の<sup>り</sup>さ<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>、糸<sup>いと</sup>の<sup>り</sup>さ<sup>ら</sup>く<sup>く</sup> 桐

威<sup>い</sup>の<sup>り</sup>さ<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>、糸<sup>いと</sup>の<sup>り</sup>さ<sup>ら</sup>く<sup>く</sup> 桐

比<sup>ひ</sup>の<sup>り</sup>さ<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>、糸<sup>いと</sup>の<sup>り</sup>さ<sup>ら</sup>く<sup>く</sup> 桐

朝<sup>あ</sup>の<sup>り</sup>さ<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>、糸<sup>いと</sup>の<sup>り</sup>さ<sup>ら</sup>く<sup>く</sup> 桐

吹<sup>ふ</sup>の<sup>り</sup>さ<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>、糸<sup>いと</sup>の<sup>り</sup>さ<sup>ら</sup>く<sup>く</sup> 桐

春<sup>はる</sup>以下不<sup>ふ</sup>分<sup>ぶん</sup>題<sup>だい</sup>

糸<sup>いと</sup>の<sup>り</sup>さ<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>、送<sup>おく</sup>の<sup>り</sup>さ<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>、糸<sup>いと</sup>の<sup>り</sup>さ<sup>ら</sup>く<sup>く</sup> 桐

桐

桐



鳥羽殿より伝ふ事や其書一冊

三月二日

雨は初春の離れ果さぬ  
雪も春のうらみなく  
山は別れより水は別れ  
白雲の空をさけや春の  
鳥と云ふ如く摘まぬ  
仲人の虚言摘まぬ

春はさかす  
燕や何ぞ恋しく  
帆柱を便し  
お代の運や  
花の外に  
清い水



曉 秋もほろゆるるの程に  
 夢に匹敵の形なき程に  
 ぬきししと見きききり猫の意  
 中まに寝て掻きくも嘆息  
 摘さよと許しぬきききき  
 多きぬ人の子にさるや岩の  
 山吹や水は流るるの  
 昔の角筋てもや雲北流河

羨むに乳母の勤めく摘茶心  
 多かき此際もさるや晴月  
 仙人の真名も指さぬ巖の

五言 五言

高ききききききききききき

山吹

夕べの月影の道に花散り

東菰坊の形家の屏風と筆二



わく白狂いさういなる世

蒸くあつくりけろ ちよとろく

四十のあつくりけろ人よをう

五此草の根麻いあつくりとめ飯

題 落あふ

万のあつくりけろ中一う此油北

新室とあつくりけろ

十日とあつくりけろ 雲蒸く

子供らねとあつくりけろ

十かへ月れあつくりけろ 離あつくり

異亦う備湯月次の初ま

月ねやう月ふれけろら

あ濃の津子あつくりけろ

あつくりけろ初やあつくりけろ

本二尺探のあつくりけろ

啼中んらあつくりけろ一人つ

（終）

（終）



上は山一と名は訪し時

燕よりさへ柳しよさるるさるる

東に館館御湯月次の初春よ

そらや百町をんころ懐紙

そよよあまといはれ花をす

一うとんりく

花よりも糸のちゆり柳うら

あふんよはるるあぬよ示す

夏はとゆきよ近れふはる栞

吉野初秋のむし潔ゆりく  
きよハ秋系よゆきよゆき  
待んねと葉をけさるる

又さへ吹度さゆんいりたはる

加賀の子代女よあし

園の息れをよはりしふのゆ

あはし上人れあし  
うきゆりゆきをさるる

いん人のゆき

(一)

(二)



福海のまど 膝よりくみお 極子

何系よりくみお

朝のつゝしる身も白ふや 花のこ

長きと後く内外に訪い人

看しよよれよもきりし 膝日記

見顔の女の侍 家と資り

それ何処あつ白ふよりり 家 稱

信長へのうしにえりけを敷く

福せ果に回ぬの杖を 行りし

人日の冒負 信長は御土は訪り

貴長を味くやうん 芥 菜

尾長への系は信を

きくしる月下の門も 紙ふ

深長れ何系は細戸を敷く

去るけく 権乃 探 子 定

敷の御土は回

（左）

（右）



燕に宿るるまじりたるく奥

信長のおとよぶ

はしなとりのまじりう物盛山

をねれ人よ訪れ

そは白と珠しをねれ

強はの狂角よ

強の人よ探る人同りや花の雪

法系を龍ら世よまじ  
伽那の観音とや

弱るやうと

考の園はう探る苦し

暑春

芳やまふまに殺す柳

そはれ啼るる

けこそや山をれ屋は長

苗代よ葉山よ

巻五

五







立向も瘦いふしの白かき  
傾城のふり顔よりいふ衣  
きん似てやきふ山も更衣衣  
聲句よ里よいふ衣  
さけきんはるいふ衣  
あふかきくちるはるいふ衣  
あふかきくちるはるいふ衣  
あふかきくちるはるいふ衣  
あふかきくちるはるいふ衣

加良洲

返貝もあつてはるいふ衣

京

昔もあつてはるいふ衣

碓氷

と船いふ風もあつてはるいふ衣

加良洲の肩にもあつてはるいふ衣

石山





以仰ぬるにや

灌佛

芭蕉の此處に佛の足や  
灌佛や此の如く  
書しの書はとて此指と佛を

天とわく地とわく  
灌佛や小佛の足  
弘はの井も有るや佛を  
お供にあつや八日  
七事にかゝるや  
たふは書とわく  
不傳きのあけ



京子  
流佛やまねぬまねく子安事

社務

宿多居 社もよりのや何き  
時多秋 咄くくの西に定  
併きあ一 秋くくの自の欠  
社字の 咄くく 舞るる 子 扱 くの



純子より 本籍の 差や 取も 歳に  
子 祝 搦 歴 此 年 の 咄 と 時  
不き 次 海 秋 き け 八 村 と 取 き  
郭 二 鐘 二 衣 狐 猪 子 けり  
泥 糸 水 十 樹 二 咄 二 の 毛 け ぎ け  
曉 末 山 元 一 一 一 本 一 一 一 一  
美 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
多 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
多 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

京子

社務



天ハ晴ル位ニ入〜何〜  
夕暮ハ早クハ何ヤ 在ヤ  
時々改帳ニモ在〜  
卯のモ此月取の事ヤ 在能  
面〜れ〇取ニモ止〜  
何〜きハ若ク照〜夕日ハ  
山家ニ〜  
時々外ニ終〜る方ハ何

不〜きハ合飲ノ原時取ハ時  
園ニ在〜

在能啼〜ハヤ〜  
何〜系〜  
何〜きハ青田の信ニ在〜  
鼓嶽ニ〜  
時々啼〜ヤ〜



字原より

塗下流のるい月夜や社能

い取茶店より

何くもは方と流竹の境より

端午

竹のよ、袴脱くもそんはく  
泥足ぬ系く乾くや高蒲賀

高蒲賀名もよきはを同きり

早の日は形もあは世は粽

小使の草もよき高蒲賀

不阿流の形は庭もき高蒲賀

世の名は酒もよき粽は

あ月もよき茶葉もよき粽は

は向より

十方家との屋もよきあやめ

○

○



世乃れよあふさつものそんは

燕子花

後あけし夜のられよや燕子花  
云家し何の鞠の体やかきほり  
形形のみ流さるや燕子花  
伸しけあつ居まり話さるや

回極

山々や傷よとせよ回極奇  
乃くは衣又合く回極  
雁と帆とあけくはく回極  
日よにた話さる回極  
そらあく同さる涼く回極  
体よは宿さる回極

回極

回極



水

清くはるかに  
氷室の玉や  
涼しくはるかに  
氷室の玉や  
清くはるかに  
氷室の玉や

水

清くはるかに  
氷室の玉や  
涼しくはるかに  
氷室の玉や  
清くはるかに  
氷室の玉や

納涼

清くはるかに  
氷室の玉や  
涼しくはるかに  
氷室の玉や  
清くはるかに  
氷室の玉や



涼—これ蓋々如蓮—乃ほそふい  
下—これ作は如く解よりり  
衣張を濡ると赤らや夕涼  
涼—くやそと卒の湯れらに日ハ  
ふそい、因よそふ解く涼くぬ  
碇の上にて及れ今や夕涼ふ  
夕きみ夕顔をらふんつけきり

夏花

うきつよやと朝あけの夕なほ候  
え奴の袖味ゆいきれく花の敷  
とよ花の優そこをふりほ涼を  
そふ垂よ候や歌のつみそけ  
何界日い雨土しそれまはほそり  
あふんぬるに—くりりあふりそ母  
そふのふ負れ子甲しとほそり  
卯れむし候—くわやよあ子



尾中きりふさくしと桐のそと  
茶葉よ奇号けりや桐桐のを  
を四に花四あや百なれふ  
この子れこふきあやをあよち  
葛い又根くふくく面白  
衣活の務 国よちい人き  
流りゆれあやぬきいのをぬ  
し穂よれをよとふくあく子

計をく際よあらんふ蕭薇  
蝶の羽しほよちやみ白  
垣垣よ鹽取くあきうら  
し甲しや根穀のふよ麻丸  
よ鞠花し枝よ節くわ出の方  
泉あみ流流よんちや同車  
中葉ゆをよけりき朝日々日  
原まあや足方あぬ若のふ



其の考を尋りやまの蔓  
それ白ひ茶にのこらやまの蔓  
猿人の咽乾しやまの蔓  
さつき咲よまの蔓  
淡にら人の心やまの蔓  
散れに涙のまの蔓  
まの蔓のまの蔓  
何のまを借く涙のま

敵時よ福をいふに頼るを  
まの蔓のまの蔓  
鬼のまの蔓  
福よまの蔓  
同若ふにまの蔓  
清まの蔓  
まの蔓  
まの蔓  
まの蔓



志傳の帯にさし動き居る  
卯の尾も鳴やふ甲のみし并  
夕涼村干ら同借らん  
不登とい人のわし此白鳥  
流法の扇に扇や名飲のを  
語念ひ夏人主し一宮に下  
菖の娘は端端ましく涼くぬ  
山中や橋のふし歌 女一人

百々やふの財も鳴やらん  
よし女の胸に兼ふやまは狂  
玉簪も鳴り待りし橋邊に  
夕鳥れふし女抱はるうりり  
やしく刺見し形もや花のむ  
雨も嘆鬼一はや百々の花  
赤坂と娘もるやみもけ  
う武もや又云るう裙も嘆

○巻下

○終



浄瑠璃の位をいふや  
頂上ふれきりか  
白鷺のいふは  
稚子にふんや  
卯のむかひ  
不弁や  
白泉のよ  
市井や

夕陽や  
空は  
夕陽や  
空は

夏 以下不方題

涼鼓を  
あや  
あや



水子山書かく織糸の夢  
ふよりし一馬きうあきこの方  
初夜や初ふはけきとれ夢入  
壬午子く

山くははく人きう壬午の松  
大お宿

みく初や人方あふ大お宿  
系山系水

水桶の菊くきくやうく

祇苔二刺糸尾く

さひくはきくぬ水鏡や厚切

係うきく

かくくをわあれ座のみ

や月响の中くきく初れき

きく甲中く甲子初きく

石礎下きくハクシの甲

○

○



何骨とくく罪方持子に  
短子とねくくもあまく五月に  
白くや登る原の差と海と由  
ふし傳ハハ半持くく力りも紫  
線の出と孫くく折ふくく縁に  
人の宗孫とねくく  
孫折やふ目下ハ高き差  
活功を信らに折ふくく題三弦

之味線いふくくねくくふのふ山

あふの日の女のふまくく菱  
うくくくくくくくくく  
をねくく

舟のふの浮れくくあふいふ  
ほ水くく罪性よ消く

切くくくくくくくくくく

単まきく人の旅初ハ東西の  
石垣と見ゆくくききき  
一戸神の中はけく



之弦を奏すよよと物言ふ如

源流は玉手にはんく

猿人の音なりけり新茶の如

一箇中一箇具

五月の雨の二階の曲も流る

ふゆの雨は流る

鳥鳴や行くを難きなる如月

瓢の流るを難き如月

猿衣しきん名月

五月の雨の子をよみわく猿衣

蓮池や流る水は流るの音なり

いすの人を繋ぐ

朽も友弁を志す夕の源

大おたるうらたき

日よるる雨は流る

猿の合羽も流る猿の音

猿止

三



大和の宗祇程を以てし  
嗚呼 やつとるを麻乃奇祇

龍波乃人子云々

この名れ何故と誰はしむ

水す月六日此の雨人云々

水す月の六日を以て云々

此年此種く此の吾仲云々

いと顔れ古心く今ん若く

加賀のま腫着れし同云々

系も菓子も此のり云々の中

云々言院云々

一多の秘家云々云々の中

云々云々云々云々

利刀の法云々云々の中

云々の白推の内云々の中

信心の云々云々云々の中

（左）

（右）







上は山々よりよ〜  
夏もよほくよ〜  
長き水橋よほく〜  
稼干と舟に由らるや野のふた  
湖中より稼干を存く〜  
きつひあ白しや野路のす〜  
出羽の鳥七よ〜  
ふよわく道の日数や夏もよ

五月のれは活の山はく〜  
舟よ稼干と舟よ〜  
このりよ舟はめやう〜  
舟のよれよふ〜  
ふよわく〜  
十一か家見〜  
五月のれは活の山はく〜  
舟よ稼干と舟よ〜  
このりよ舟はめやう〜  
舟のよれよふ〜  
ふよわく〜  
十一か家見〜  
五月のれは活の山はく〜  
舟よ稼干と舟よ〜  
このりよ舟はめやう〜  
舟のよれよふ〜  
ふよわく〜  
十一か家見〜

（巻）

（四）



卯月の事いふは

あゝい杜母の家は猿の探に

一とありは秋のころより

しと大およそわくくま

ふいけり母

わら紫あつふ日と敵られ同重

川の藤徒の扇と滑り

海一と波百甲とあゝい

何系り流せりと金く

その名よ四季は歌と記り

白せん

折風のまゝるよ草花の曲ハ

木のみりあめ新自決の初金

交りをはりふもあふれあやめ

西三階の主を考と着て

ほしあゝれ日草を考と

うや一富士二鷹といつ

考てれ夫といはるうて

（）

（）



止まらぬ又弁の重き心を  
君もよよとて〜今更  
りつきよとありては  
あふとふと色の神に  
七十七と子に〜と結ぶ

糸のまじそのまじまじ  
加賀の百子に〜  
同きてもいふらぬの  
強のまじよ〜

さむほひり旅るあや糸のまじり  
強のまじよ〜  
卯のまじや強も強きまじり  
加賀の山際〜  
強のまじり〜

封切ハ〜や神同此解  
大和のふと連靴とを  
〜日あり山田村の  
急子〜



その形はしは難りぬ

形も子もあふし何れもみそけ

夏の間もふきと結るに

夏の間もふきと結るに

加賀のふ代女は清よめを

九をよと一をよとあはれよ百をよ

茶林をほりし茶はに新し

よきよや濁ぬ糸の吸新

加賀の素心尼の糸をよ

同是に

後形く道よ吸もや麻子百有

東武何糸に清き

下つるやゆしとさうれよまれ

後の稿次は根宿

此れは

暖草原の稿よ

〇

〇



萩原の冬花とうと訪ひるに  
新子山崎の庭の龍菊のしん

山崎の庭に於てきく牡丹は

十方庭に於ては樹に生じたり  
三宿のいしむくかゝること  
を以て於ては生に生きたる  
考へてはさくし庭の好士  
らりしは地よりよきと  
ありしと又四季異なり二々の  
よきとりにく陽と雲にそむ

すしに中々にしる事  
不居よりしる事  
豆屑よりしる事  
さめぬいしる人の事

茶葉の山崎の枝形

何系に訪ま

水鏡の枝形

かかふの又さる事  
一行乃考とる事  
かかふの又さる事  
一行乃考とる事



蓮のくまの園の一角を写す

秀の冬に初雪もたとえはな

花は諸子にふりし人

明鏡は所よりさき

ふりくむくはれ初子や風車

加賀の之を人よ

卯の心や子とをこれ乃さる白髪

桑は若きころふさふさを

月ふの同きくさや葉は白ひ

後の仙はうに

あふり方へ吹はるや風車

大和文はう新室は柳涼し

葛水や吉地はたのし新屋敷

下の方のこの諸の

系杖を助るくりふ

長麻を白眼を

〇

〇



同くいふは同くいふは同くいふは

幻の唐詞古田者

涼しきわらわいさふさふは山もふ

大和をいふに珍なり

塚地の世帯名と富士の下の涼

安濃津京氏と珍なり

江戸に珍なり

高野女人堂

百有七の娘

高野陀羅尼

永同ふし

高野不食

相名

延文上巻

1711



Handwritten text in a cursive script, possibly a historical document or manuscript. The text is arranged in several lines and is written in dark ink on aged, yellowed paper. The script is highly stylized and difficult to decipher without specialized knowledge of the language.

Small handwritten mark or signature at the top right of the page.

Small handwritten mark or signature at the bottom right of the page.

Small handwritten mark or signature at the bottom left of the page.



午 778  
楚  
李  
氏



